

# 営農のしおり

## 水田管理の総仕上げ

6月の低温・日照不足により一時は有効茎が確保できるか不安に感じた時期もありましたが、品種・ほ場により差は見受けられますが生育量も回復してきました。これから出穂期を迎えるにあたり適切な水管理・防除が必要となってきます。

### ◎出穂期～穂揃期

光合成が盛んに行われ、稲が最も水分を必要(花水)とする時期です。湛水状態の管理を徹底しましょう。

### ◎登熟期

この時期の水管理は食味・品質・収量に大きく影響します、2湛2落を基本とした間断かん水を行きましょう。出穂後20日までは、作溝に一部水が残る程度に行い、それ以降～30日までは、足を入れてかかと部分に一部水がにじみ出る程度を目安にしましょう。

### ◎落水時期

出穂後30日を目安にして下さい。早期落水は登熟不足による品質低下の要因の一つです。ほ場の透水性・登熟状況を確認し落水時期を調整してください。

### ◎異常気象に対する水管理

登熟期間中の異常高温や強風(フェーン現象)は稲体の消耗が大きくなり、活力が低下します。今後の気象予報に注意いただきこのような現象が予測される場合は、間断かん水から一時的に浅水管理にして、ほ場を飽水状態にしましょう。

### ◎病害虫防除について

出穂期は病害虫の被害を最も受けやすい時期です。特に「いもち病」や「斑点米カメムシ類」の発生は品質・収量を著しく低下させます。こまめにほ場を見回り、各地区の防除計画を遵守し防除を実施しましょう。

また、管内一部でアワヨトウの幼虫による食害が確認されております。食害スピードが著しく速いため、ほ場の見回り際には稲が食害を受けていないかどうか注意を払っていただくようお願いいたします。ご不明な点がございましたら、最寄の営農課までお問い合わせください。

酒田ひがし営農課 岡部真治



▲適切な水管理と防除で本田管理の総仕上げを

## 園芸だより

作物にあつた展着剤の選択と有効な使用方法について

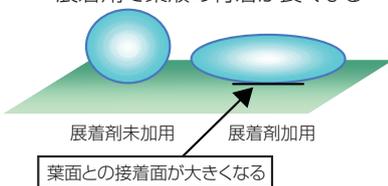


### ■展着剤の使い方

農薬は粉剤、水和剤、水溶剤、乳剤、フロアブル剤、液剤と形態によって分けられています。薬剤が役割を果たすためには「混用の順番」も重要で、原則として薬剤の安定性の高いものから順に混用します。

■展着剤の特徴  
展着剤の効果をより高めるのが展着剤です。展着剤には大きく分けて3つの機能があり、①濡れ広がり改善する「展着剤」②浸透性を高める「機能性展着剤」③対象への固着を高める「固着性展着剤」です。①は散布液の表面張力を下げるため、水だけでは濡れにくい作物や害虫への付着を良くして防除効果を高め、主にハイテンパワー等があります。②は展着剤の機能プラス、植物の表面から内部へと染み込ませる機能を併せ持ち、ニースやミックスパワーがあります。その他に可溶化力(溶解するようになる)を強くし、植物の薬剤による汚れを軽減するスカルシユなどもあります。展着剤は多すぎると性能が十分に発揮できないばかりか薬害が生じる恐れがあるので、決められた分量を混用するよう注意しましょう。

展着剤で薬液の付着が良くなる



展着剤をうまく使うことによって薬液の量を減らしたり、殺菌・殺虫力を高めたりと長期にわたった効果が期待できます。これから薬剤散布が多くなる時期になります。農薬の選定や使用方法などのご相談は最寄りの園芸センターや資材店舗にお問い合わせください。

最初の水に混用するのは「展着剤」です。農薬が水中で分散しやすくなる作用があるからです。次に混用するのは最も安定性の良い「乳剤」です。乳剤は油からできていて、すでにビンの中で混ざりやすい状態になっているため、希釈すると水中でスムーズに分散します。その後は、水への溶けやすさや薬剤の粒子の大きさの順番で混用します。「液剤」は水溶性の液体で、すでに水に溶けていますが使用前は良く振ってから使用するようにしましょう。「フロアブル」は水和剤より粒子を細かくして水に溶かしている薬剤なので、これも良く振ってから計量、混用を。「水和剤」は粉状の薬剤なので水に溶かして使用します。

園芸課 庄司 功